サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～another sky～

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｋｙ～

【Ｎコード】
Ｎ２４２１Ｙ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
サドで邪悪な召喚獣のｉｆシリーズです。今回はヒロインを島田美波に置かせていただきました。
美波が日本に帰る数日前に理音と美波はドイツの空の下で出会います。
その出会いの中で生まれた淡い恋心は別々の空の下でどのように成長していくのでしょうか？

第1問

（……来週には日本か？　日本語なんてわからないし）

公園のベンチで1人の少女『島田美波』は空を見上げて小さなため息を吐く。

（……日本になんか行きたくない。でも、葉月が泣いちゃうし）

美波は両親の仕事の関係で幼い日からドイツで暮らしており、両親の仕事で日本に戻る事になったのだが暮らし慣れたドイツを離れたくない思いが強いようでもう1度、ため息を吐いた時、

「下がれ！！　この子がどうなっても良いのか！！」

「へ？　な、何？　何なの？」

「騒ぐんじゃねえ！！　死にたいのか！！」

ナイフを片手に周りを警戒する男性が美波をつかみ、彼女の首筋にナイフの刃を当てると美波はいきなりの事で声をあげるが男性は興奮しているようで美波を怒鳴り散らす。

「……ったく、バカな事をしていないで、ばばあから奪った荷物を返して、そいつを解放しろ。今なら許して死なない程度に痛めつけるだけで許してやる」

「だ、黙れ！！　近づくんじゃねえよ！！　ガキのくせに俺をバカにしやがって」

「……ばばあを吹っ飛ばして荷物を盗んだバカをバカにして何が悪い。道徳も知らんバカが偉そうに言うな。へどが出る」

「ちょ、ちょっと、あんた、何、挑発してるのよ!?　見てよ。今、女の子がピンチなのよ」

その時、1人の無表情な少年がこちらに近づいてくると男性は少年にナイフを向けるが少年の表情は変わる事も美波の事など気にかけている様子もなく美波は声をあげると、

「ん?　すまん。胸がないから、女だと気付かなかった」

「何ですって!!　ちょっと放しなさいよ!!　あの男、私が気にしている事を!!」

「さ、騒ぐな!?」

少年は気にする事ないばかりか美波の気にしている少し周りの同じ年の少女達より寂しい胸をバカにされた事に少年を怒鳴りつけると男性は声を上げた美波の様子に驚いた時、

「……死ね」

「な、何なの!?」

少年の腕にはなぜか打ち上げ花火が握られており、美波を人質に取っていた男性の腕を撃ち抜いた後に花火は美波の身体に当たる事なく男性を撃ち抜いて行き、男性の手から美波が放れる。

「こい」

「へ！？」

少年は男性の手から美波が放れた瞬間を見逃す事はなく、美波の手を握りしめると美波を引き寄せ、美波は少年の腕の中にすっぽりと収まると、

（……な、何？）

美波は自分を抱きしめている少年の顔を見上げると少年の顔は奇麗に整っており、悪態を吐きながらも自分を助けてくれた少年の体温に自分の体温があがって行くのを感じる。

『ご協力ありがとうございました！？　ま、前田博士！？』

「前田博士？」

「ん？　どうかしたか」

騒ぎの原因になっていた男性は駆け付けてきた数名の警察官に取り押さえられ、警察官の１人が少年に頭を下げようとした時、少年の顔を見て驚きの声を上げると美波は首を傾げながら少年の顔をもう１度見上げるが少年は警察官が驚いている意味がわからないようで首を傾げると、

「俺の事は気にしないで良い……悪いな。ケガはないか？」

「ちょ、ちょっと、何よ？」

少年は美波の顔を覗き込むと彼女にケガはないかと確認し始め、美波は目の前に映る少年の顔を見て、少年から視線を逸らす。

第2問

「小さいが擦り傷が付いてるか」

「ちょ、ちょっと、近い！？　近いわよ！？」

「動くな……これで良いな」

少年は美波の顔を覗き込むと頬には小さな擦り傷があったようで懐から小さな薬瓶を取り出すと美波の頬に薬を塗り、絆創膏を貼りつける。

「あ、ありがとう」

「ん？　気にするな。巻き込んだのは俺じゃないな……文句はあの窃盗犯に言え」

「言えるわけがないでしょ……あれ？　あんたって日本人？」

美波は少年にお礼を言うと少年は美波に自分が頭を下げる理由はないと思ったようで美波に警察官に捕まっている男性を指差すが美波は少年の様子に大きく肩を落とした時にドイツ語で会話をしていたため、気づくのが遅れたが少年が日本人だと言う事に気づき、

「あぁ。そうだ。前田理音だ」

「わ、私は島田美波よ」

少年は自分の名前を『前田理音』と名乗ると美波は慌てて自分の名

前を名乗ると、

「あんた、日本人なのになんでドイツにいるの？　両親の仕事の関係？」

「いや、今は学会で新技術発表があってな。１週間程度ドイツに滞在する予定だ」

「学会？　新技術発表？」

美波は理音がドイツにいる理由を聞くが理音の口から出る言葉は明らかに同年代の少年から出る言葉ではなく、美波は首を傾げる。

「説明が面倒だな。これで良いか？」

「名刺？　……えーと、どう言う事？　あんた、私と同じ年くらいでしょ？」

「ん？　簡単に説明すると俺は天才と言うものに分類されるわけだ」

理音は説明が面倒なようで懐から名刺を取り出して美波に渡すとその名刺には少年がアメリカの大きな研究所の研究員である事を示しており、美波は理音の経歴が信じられないようで目を白黒させるが理音は気にする事なく、自分を天才だと言い切り、

「天才？　あんたが？」

「あぁ。世間一般ではそう言われるらしい。別に興味などないがな」

美波は理音の顔と名刺を交互に見比べ、その行動は理音の事を知っ

ている人間から見るとかなり失礼なのだが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ、行かないといけないんだが」

「あ、あのさ。ちょっと待って。あんたって天才なのよね？　日本語ってわかる？」

「……何を言っているんだ？　美波だったか、お前も日本人だろ」

理音は時間を確認すると時間がないのか歩き出そうとするが、美波は何かあるようで理音の腕をつかみ、日本語を教えて欲しいと言い出し、理音は美波の言葉に意味がわからないようで首を傾げる。

「そ、そうなんでけど、私、小さい頃からドイツに住んでるから日本語ってわからないのよ。それなのに来週には日本に帰る事になって、日本語がわからないし」

「そう言う事か？　……悪いが他を当たってくれ。俺はそんなにヒマじゃない」

「ちょっと待ってよ。お願いよ」

美波は今の自分の状況を放すと理音は状況を理解したようだが自分に彼女の相手をする理由がないため歩き出そうとするが美波は必至なようで理音の腕に抱きつき、

「……しつこいぞ」

「良いでしょ。天才なんだから、それくらい手伝ってよ」

理音は美波を引きずったまま歩きだす。

第3問

「……ここまで付いてくるとはお前はバカか？」

「う、うっさいわよ。だいたい、あんたが私に大人しく日本語を教えてくれれば良いわけでしょ」

結局、美波は理音の泊まっているホテルまで付いてくると理音は根負けしたようで大きくため息を吐いて美波を自分の借りている部屋まで招きいれるが美波は理音の態度に文句があるようで頬を膨らませ、

「ったく、日本語を教えろと言うのにまったくの無計画なのか？だいたい、1週間程度で覚えれるほど、お前は賢いのか？」

「それを考えるのが天才のあんたでしょ」

「……まったく、簡単に言ってくれる」

理音は美波の様子の眉間にしわを寄せて1週間程度で何ができるのか聞くが美波は頬を膨らませたままである上に特に何も考えていないようで無責任に理音で任せるつもりのようで理音はその様子に大きくため息を吐く。

「だいたい、日本語なら両親に教わるのが普通だろ。それも普通に考えて会ったばかりの人間の後にホイホイ付いてくる人間がどこにいる？」

「ちょ、ちょっと、何する気よ！？」

理音は美波の行動は常識から外れていると彼女との距離を詰め、美波は理音に襲われると思ったようで理音を押しのけようと手を伸ばすが、

「そんな貧相なものに欲情などするか」

「な、何よ！！　その態度は」

理音は美波の手を交わして彼女から離れると美波の胸ではそんな気分にはならないとため息を吐き、美波は気にしている事をバカにされたため、理音を怒鳴りつけるが、

「……落ち着け。だいたい、文句を言いたいのはこっちだ。俺はお前を助けてもなんの得もないんだぞ。だいたい、さっきも言ったが日本語なら両親に習えと言うか日本に戻る事も考えられる仕事だったんだろ。それを怠ったのはお前の両親だろ。なぜ、俺がお前の両親の尻拭いをしないといけない」

「そうかも知れないけど」

「まったく」

「ダ、ダメよ。私だっていろいろと、理、理音は確かにキレイな顔をしてるし、助けてくれた時はちょっとカッコイイかも？　とか思ったけど、やっぱり、会ったばかりなわけだし」

理音は落ち着いた様子でもう1度、美波に両親に日本語を習うように言うが美波は何かあるのか首を横に振り、理音はため息を吐くと彼女の頬に手を伸ばし、美波は理音の先ほどの行動もあるのか顔を

真っ赤にしておかしな事はしないでと言う。

「……だから、何度も言ってるだろ。おかしな勘違いをするな。美波、お前の日本に帰った時の住所を教えろ。必要なものができたら送ってやる」

「う、うん。ありがとう。えーと、ダメよ。私、漢字が書けないのよ」

理音は何か思いついたようで美波に日本に帰った時の住所を聞くと美波は理音の言葉に大きく頷くと日本の住所を書こうとするが住所を日本語で書けない事に気づき、

「……お前、本当に頭は大丈夫か？」

「な、何よ？」

「携帯は持っているか？　メールアドレスでも良い。わかったら、このアドレスに住所を送信しろ。必要なものができたら、送ってやる」

「う、うん。そうする。ゴメンね。迷惑をかけて」

「そう思うなら、熱くなるな。頭に血が昇っている間は間違った事しかできなくなるぞ」

理音は美波の様子に完全に呆れており、美波は理音の様子に流石に悪い事をしている事に気付き始めているようで申し訳なさそうな表情をして謝り、理音はそんな美波の様子に表情を変える事なく言う。

第４問

「理音、こんなところで何してるの？」

「ん？　美波か？　……なんだ？　この小さな生物は？」

美波は理音と出会った翌日に、彼と出会った公園を妹の『島田葉月』の手を引いて散歩していると理音がベンチに座り、空を眺めているのを見つけて声をかける。

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

「……そうか」

「理音、この子は私の妹の葉月よ」

葉月は理音に小さな生物と呼ばれた事が不服なようで頬を膨らませるが理音は気にする事なく空を眺めており、美波はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべると理音に葉月を紹介し、

「お姉ちゃん、このお兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏さんですか？」

「は、葉月！？　いきなり、何を知ってるのよ！？」

葉月は理音の隣に座って、理音の顔を覗き込むと葉月は美波に理音は彼氏かと聞くと美波は葉月の言葉に驚きの声をあげる。

「……小さな生物、何をおかしな事を言っているんだ」

「葉月です」

「……葉月、おかしな事を言うな。現状で言えば、お前の姉は俺の依頼人であるだけだ。依頼料の交渉はまだだがな」

理音は葉月のおかしな勘違いを否定すると理音は美波から1つの依頼を受けているだけだと話し、

「そうなんですか」

「……」

葉月は少しだけつまらなさそうな表情をする隣で美波は少しだけ理音が自分の事を何とも思っていない事にショックを受けているようであり、

「それで、こんなところで何をしてるの？」

「ん？　あぁ。美波、お前を待っていたんだ。これを渡そうと思ってな」

「何これ？　ＵＳＢ？」

葉月は自分が理音の言葉にショックを受けるはずはないと大きく首を振ると理音に公園にいる意味を聞き、理音は欠伸をした後、ポケットからＵＳＢメモリーを取り出して美波に渡すが美波は意味がわからないようで首を傾げる。

「簡単な独和と和独の辞書のようなものだ。一般的な会話で使うものなら、それでしばらく勉強していろ」

「これ、私のために作ってくれたの？」

「……そう言う約束だろ。まったく、忙しいなか、作ってやったんだ。無駄にするなよ」

「う、うん。ありがとう」

理音はＵＳＢメモリーの中にあるものを説明するとあまり寝ていなかったのか欠伸をしながらベンチから立ち上がり、美波は愛想こそないが自分のわがままを聞いてくれる理音の事が気になるようでちらちらと理音を見ながら礼を言い、

「それじゃあ、俺はホテルに帰るぞ」

「ひょ、ひょっとしてこれを渡すために待っててくれたの？」

「……バカな事を言うな。散歩のついでだ。仮にあったら一手間減るだろ」

「お兄さん、お腹減ってるですか？」

理音はホテルに帰ろうとすると美波は理音がこのためだけにいつくるかわからない自分を待ってくれていたと思ったようであり、顔を赤らめるが理音にはそんな気は全くなく、美波にバカを見るような視線を向けた時、理音の腹の虫が鳴き、葉月は理音の様子にくすくすと笑う。

「……あぁ。そう言えば、昨日から何も食ってなかったな」

「き、昨日って、理音、あんた、何をしてるのよ？」

「ん？　気にするな。こんなのはいつもの事だ。何かに集中し始めると睡眠も食事も身体も脳も忘れる」

理音は表情を変える事なく、食事をとっていなかった事を白状すると美波は慌てるが理音にとっては日常茶飯事の事のようであり、

「そんな大切なものを忘れるわけがないでしょ。ちょっと、来なさい。葉月、帰るわよ」

「ハイです。お兄さんも行くです」

「待て。どうして、そうなる？」

「良いから、来なさい。これのお礼とでも思っていなさいよ」

美波は理音の腕をつかむと理音を引きずって歩きだし、葉月は理音と美波の様子に何かを感じているのか嬉しそうな表情で理音の手を握り、美波と葉月は理音を自分達の家に連れて行く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2421y/

サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～another sky～

2011年11月9日19時37分発行